

2014年1月26日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 17章 5～10節

説教：信仰を増してください

## 1 信仰を増してください

### 1) 「からし種ほどの信仰があったら」

使徒たちも主に願いました。「私の信仰を増してください。」おそらく誰もが同じように祈った経験がおありだろうと思います。今日は、信仰を増すとはどのようなことなのかを考えていきます。

使徒たちの願いに対して、主は6節でこう答えました。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ』と言えば、言いつけどおりになるのです。」

言い方を変えればこういうことです。目の前に桑の木があって、「根こそぎ海の中に植われ」と命令して、もし本当にそうなったとするなら、その人は少なくともからし種くらいの信仰があるとわかります。

でも、どうですか。こんなことができる人が今までいたでしょうか。少なくとも、私にはできないことです。からし種ほどの信仰もない、誠に情けない牧師です。弁解するわけではありませんが、できないのは私だけではない。イエスの時代から今までのこの二千年間、このようなことができる信仰をもった人がいたとは聞いたことがありません。

イエスは何を言いたいのでしょう。「あなたがたはからし種ほどの信仰もないのですか。まだまだ訓練が足りません。」責めるために語ったのか。そうではありません。

### 2) 使徒たちが願った動機

使徒たちはどんな動機をもって「信仰を増

してください」と願ったのか。そこがポイントです。前回触れましたが、イエスは4節でこう語っていました。「かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めませ』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

使徒たちはこのことばを聞き、何かを思っ「信仰を増してください」と言ったようです。自分に対し罪を犯す者を赦すことのできる信仰。そんな信仰を与えてほしい。立派な願いに見えます。でも、その先にある動機は何でしょう。使徒たちは実は何を願っていたのか。イエスを先頭に立てて、イスラエルに革命を起こす。イエスが王となったとき自分たちはその側近になる。そんな野望もっています。その人たちが「信仰を増してください」と願うのですから、おそらくこんな動機が隠れています。「もっと信仰が増せば、イエスは自分を良く評価してくれる。そうすれば高い地位に就くチャンスが生まれてくる。」

イエスは使徒たちの心の中にあるものを見抜き、あなたがたにはからし種ほどの信仰もないと言われます。繰り返しますが、責めているわけではありません。かりに桑の木が海の中に植わるような信仰を求めても、そんなことは意味がない。そんなことよりもっと大切なことがあると言いたいのです。では、もっと大切なこととは何か。次にそのことを見ていきます。

2 たとえ話

## 1) 信仰とどんな関係があるのか？

それを説明するためにイエスはたとえ話を語ります。10節を読みます。「あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまつたら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」

みなさん不思議に思いませんか。「どうしたら信仰深くなれるのでしょうか」と尋ねられたら、普通はこのように答えるでしょう。「毎朝聖書を読み、祈りなさい。毎週欠かさず礼拝に出席しなさい。ささげるべきものをささげ、神を愛し、人を愛しなさい。」

ところがイエスはまったく信仰とは関係がないようなことを言われます。このしもべのようにいつも謙遜でありなさい、ということは何となくわかりますが、それが信仰とどんな関係があるのか、にわかに結びつきません。

## 2) 食べものと飲みものを備えるしもべ

子どもの時に「あぶり出し」という遊びをしたことがあります。ミカンの汁で筆で文字を書きます。乾くと文字は見えなくなります。でも、火があぶると文字が浮き出てくる。そんな遊びです。このたとえ話もあぶり出しに似ています。イエスがたとえ話を語るとき、自分と関係のないことを語ることはありません。すぐにはわからないのですが、注意深く観察すると、イエスのお姿が浮かび上がるように必ずできています。

いったいどこにイエスのお姿が隠れているのでしょうか。ヒントは8節にあります。「私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕をしなさい。あとで、自分の食事をしなさい。」英語の聖書の訳のほうが原文

に近いでしょう。直訳すればこうなります。

「私が食べたり飲んだりしている間は、私に仕えなさい。その後で、あなたは食べたり飲んだりしなさい。」「食べたり飲んだり」というフレーズをわざわざ二度も繰り返しています。しもべは、主人のために、食べるものと飲むものを準備する。そこがたとえ話のポイントです。

このしもべこそイエスのことであるとしたら、どういうことになりますか。イエスは、ご自分のからだを十字架で裂き、「取って食べなさい」と言われ、私たちのためにパンを分け与えてくださいました。イエスは、ご自分のからだから血を流され、「これは新しい契約です。これを飲みなさい」と言われました。

このたとえ話を最初読んだときはわかりませんでした。よく見ると今私たちが月に一度いただいている聖餐の場面のことを取り扱っていたことが、まるであぶり出しのように浮き上がってきます。

## 3 イエス

### 1) なすべきことをしただけです

神のひとり子である方が、罪人である私たちのために、ご自分のからだを裂き、分け与えてくださいました。ご自分から流された血を飲むようにと勧めてくださいました。

皆さんはこんな経験はないでしょうか。家族のために、あるいはお客さんのために食事を整えるという場面を想像してください。この食材を買うのにどれだけ苦労したのか。この香辛料を手に入れるのにどれだけ探し回ったか。火加減をコントロールするのにどれだけ気を配ったか。苦労してつくったものであればあるほど、食べる人に知ってもらい

たい。そう思うのではないのでしょうか。ところが、食べる人が感謝もせず、さんざん食い散らかしたり、後で食べるからと言って食卓に来ようとしめない。そんな態度を取ろうものなら、どうなるでしょう。もう、つくって上げない。そんなふうに言いたくなるでしょう。

しかしイエスはどうされますか。食事を整えたイエスは、「わたしは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。」そう言って、静かに目立たぬように、そっと陰に隠れていきます。

福音書のなかのイエスのことばを読むとき、しばしば思うことがあります。どうしてイエスのことばは、いつも回りくどくてわかりにくいのか。理由がありました。ご自分を見せびらかしたり苦勞話を声高にする方ではないからです。なすべきことをしただけですから。なので、いつもご自分のことがわからないようにお語りになります。

## 2) 役立たずの者を招く神

最後に考えます。使徒たちは「信仰を増してくださいです」と願いました。それに対して、イエスはしもべのたとえを語ってお答えになりました。弟子たちは誰が一番偉いのかを競い合っています。できれば自分こそ一番信仰深い者であるとイエスに認めてもらうことを最大の目標としています。たとえ話に則せば、彼らはこう言いたいのです。「先生見てください。私は役に立つしもべです。あなたが命じてくださったことを、私はすべてきちんとすることができました。」

会社でも学校でも、成績とか評価というものがかかります。どれだけ自分が高く評価されるか。そのことにしのぎを削りながら生

きてきました。信仰もいつの間にかそうなっ  
ていきます。神から評価されるために、自分は何をするか。あなたは今日何をするか。信仰深くあらねばならないと常に自分をせき立ててきました。「信仰深い者にしてください」と祈っていても、心の底には良いクリスチャンとして認められたいという動機が潜んでいたかもしれません。

でも主はなんと言われましたか。どんなにがんばっても、からし種ほどの信仰にも達することはできません。人間のあいだでは、あの人の信仰がすばらしいとかすばらしくないとか、勝手に評価しますが、神の目から見ると、そんなものはドングリの背比べなのです。そこで主は言われるのです。「信仰を増してください」と願うことよりも、「私は役に立たないしもべです」と言いなさい。

自分の苦勞を誰かに知ってもらいたいと強く願うタイプの方には不満かもしれません。でも、これは私たちの救いのことばです。なぜなら神はこのように語っているのと同じだからです。「あなたが役に立たないしもべであっても、なにも問題ではない。あなたが役に立つとか、役に立たないとか、そのような評価は神はまったくしませんから。」

「でも」と、ある方は言うでしょう。「なすべきことをしただけです、と言いなさいとあるではないか。やっぱり、なすべきことをきちんとする必要があるのではないか。」

いったい「なすべきこと」とは何でしょう。イエスにとってなすべきことは十字架でした。では、私たちにとって「なすべきこと」とは何でしょうか。

役立たずの私たちのために、主ご自身がみずから自分こそ役立たずのしもべですと語ってくださったのです。主でさえ、自分は

役立たずであると言われるのです。ならば、私たちはどうなるのでしょうか。どんなにかんばっても役に立つ者となれません。妙な言い方かもしれませんが、私たちがなすべきことはこれしかない。「私は役立たずです」と言って、主が備えてくださったパンと杯にあずかる。これだけです。

神は役に立つ者を招いているのではありません。むしろ役立たずの者を招いてくださいます。主ご自身が、先だってそのようなお姿を示して下さいました。